

大分大学大学院 経済学研究科 同窓会誌

# 四極青雲会

せいいうん

青  
雲

第七号

# 目 次

2018年は高等教育の転機となる年	足立 一馬	2
社会イノベーション学科について	松隈 久昭	〃
人生は予期せぬことの連続です	渡邊 博子	3
大分大学とのご縁	内田 知男	〃
大学院の地域貢献	高橋 秀武	〃
シルバー留学と「惻隱の情」	溝部 佳子	4
求められる幼児教育・保育界における経済学的視点	吉田 茂	5
図書館の醍醐味	高榎 真一	〃
“Reflections on Japanese Education, then and now.”	バハウ サイモン ピーター	6
国外に出てみて思うこと	石川 秀幸	〃
「戌年」に思う	清末 和弘	7
医療福祉にどっぷり	土居 昌弘	〃
守るべきもの	後藤慎太郎	8
我等3人	井 英昭	〃
看護学教育とプロジェクト活動	小野 美喜	9
中小企業を支援し、地域活性化を目指す	川津 大樹	〃
卒業後5年間を振り返って	田中 啓太	10
夢の実現に向けて学んだこと	上野 恵美	〃
3つの幸運	西本 山海	11
私の趣味	青山 智幸	〃
「地域とともに生きる」—春節祭を通じて—	里中 玉佳	12
人生100年時代	井上桂太郎	〃
大分で学んで忘れられない授業	楊 光	13
留学生活の感想	宋 霞	〃
念願の四極会女性部会設立	渡邊 博子	14
第7回 総会・記念講演および懇親会	事務局	15
第13回 定例会—イノベティブ経済セミナーとして大分大学と共に—	〃	16
第14回 定例会—イノベティブ経済セミナーとして大分大学と共に—	〃	17
新院生の紹介	〃	〃
「課題研究」へのお誘い	〃	18
先輩諸氏の情報網を活用しませんか	〃	〃

# 2018年は高等教育の転機となる年

国立大学法人大分大学 監事

(大19回) 足立 一馬



2018年は高等教育の転機となる年になります。少子化が進み地方を中心には児童・生徒数、学校数が減少しています。1989年（平成元年）と2016年（平成28年）と比べてみると公立小学校の児童・生徒数は950万人から637万人に、学校数は24608校から20011校に、公立中学校の生徒数は539万人から313万人に、学校数は10578校から9555校に、公立高等学校の生徒数は539万人から313万人に、学校数は5523校から5029校に減少しています。

特に地方において公立小中高の適正配置（統廃合）が進んでいます。私は公立小中高の適正配置に関わりました。在

るものが無くなることに賛成する人はいるのが多かったです。2018年は日本の高等教育の転機となる年になります。この10年間ほぼ横ばいだった18歳人口は減少期に入り、1990年代前半に200万人を超えていた18歳人口は現在では120万人に留まり、さらに2030年には100万人をきるといわれています。

大学の統廃合や大学連携が始まる時代を迎える。文部科学省は2013年に全国の国立大学にミッションの再定義を示しました。全国の86大学の64%にあたる55大学は「地域活性化の中核的役割」をミッションとして選びました。大分大学をはじめ九州管内の8大学もこの「地域活性化の中核的役割」をミッションに選んでいます。

大分大学は2017年度から「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業CO C+」に取り組み事業目標として県内就職率を現状の43%から53%に向上させるという高い目標を掲げています。地域が求められる人材をいかに確保し育していくか、同じミッションをもつ大学と切磋琢磨していくかねばならない時代を迎えていきます。

これまで以上に同窓生の皆様方の母校への支援をお願い申し上げます。

ません。子どもたちが成長段階に応じてコミュニケーション力や社会性を身につけていくために学校にはある程度の規模が求められます。公立の小中高の適正配置はこれからも進めしていくと思いま

す。

18歳人口が減少期に入る2018年

は日本の高等教育の転機となる年になり

ます。この10年間ほぼ横ばいだった18歳

人口は減少期に入り、1990年代前半

に200万人を超えていた18歳人口は

現在では120万人に留まり、さらに

2030年には100万人をきるといわ

れています。

大学の統廃合や大学連携が始まる時代

を迎える。文部科学省は2013年に

全国の国立大学にミッションの再定義を

示しました。全国の86大学の64%にあた

る55大学は「地域活性化の中核的役割」

をミッションとして選びました。大分大

学をはじめ九州管内の8大学もこの「地

域活性化の中核的役割」をミッションに

選んでいます。

さて、今回は平成29年度に新設された

社会イノベーション学科について説明し

たいと思います。まず、本学科は、社会

における新しい価値の創造（イノベー

ション）について幅広く学ぶ学科です。

具体的には、新商品・サービスの開発と

いった企業経営上のイノベーション、地

域活性化等の社会課題解決、公的サービ

スと企業・市民の協働が求められる社会

経済状況等について教育研究することを

目指しています。

では、どのような人材育成をしたいの

かというと、企業経営での新商品・サー

ビス開発や、地域活性化のための街づくり等の事業創造において、これに関する

基礎的な知識を備え、企業間、企業と行

政・NPO・市民間等、組織の中でこれ

に携わる人材の育成を行う学科です。

主な必修科目としては、初年次向け科

目として「イノベーション・マネジメン

## 社会イノベーション学科について

大分大学経済学部  
社会イノベーション学科長  
教授 松隈 久昭



具体的には、29年度に行なった「ソーシャルイノベーション創出実践ワークショップ」では、大分トリニティの観客数増加策や府内5番街の商店街活性化について、企業や商店街の担当者の方々と学生が共同して、課題解決型学習を行いました。今後も新たなテーマを現場の方とともに設定し、課題解決に向けた社会イノベーションを検討したいと思います。課題解決型学習は、社会で活躍されている方々のアドバイスが必要ですので、今後も青雲会の皆さまのご協力をお願いしま

す。

人生は予期せぬことの  
連続です

大分大学経済学部  
社会イノベーション学科  
教授

(大36回、院12回) 渡邊 博子

『青雲』創刊号に「将来への橋渡しとして」という題で寄稿させていただきました。大学院第12回入学時の懐かしい写真の掲載とともに、当時の様子を思い出し、「……これまでの人生は『縁と運』の連続」と、これは今でも変わりません。ただ、「……大分で生まれ育った年月にも迫る期間、まさか東京で生活するようになるとは……」と感慨深く綴り、おそらく終身東京にいるだろうと見越して、6年後にまさか大分に戻るようになるとは、しかも母校で働くことになると全く考えてもいませんでした。

2017年の春、多くの方々のおかげで、城西大学から大分大学に異動、経



極的に参加しました。同窓会が縁となり、金融機関との連携で「地域イノベーション研究会」を発足、大分地場企業のイノベーションを勉強させてもらっています。また、女性起業家や女性リーダーにもお会いし、パワーのすごさを身近に感じています。

徒然に書かせていただきましたが、本当に人生は予期せぬことの連続です。次に何が起こるのかワクワクしながら、与えられた境遇で、とにかく母校のため、後輩学生たちのため、精一杯努力していく所存です。よろしくご指導のほどお願ひ

また、四半世紀ぶりの故郷となるためとにかく大分のことを学びなおそうと、各種情報に目を通したり、郷土資料コーナーが常設されている図書館に通つたりもしました。何から何まで新鮮でしたし、強力な産業政策とともにモノづくり県としての立ち位置などをあらためて確認することもできました。

目の「ユニバーサルデザインと人にやさしい社会」では四極会の大先輩が社会人聽講され、さすがに緊張しましたが何とか無事終了。四極会寄附講義「企業研究では時間がゆるす限り聽講させてもらいました。お忙しい中、諸先輩方や後輩たちの熱く講義される姿にはただただ頭が下がるばかりでした。

徒然に書かせていただきましたが、本当に人生は予期せぬことの連続です。次に何が起るのかワクワクしながら、与えられた境遇で、とにかく母校のため、後輩学生たちのため、精一杯努力していく所存です。よろしくご指導のほどお願

四極会、青雲会などの同窓会活動も積極的に参加しました。同窓会が縁となり、金融機関との連携で「地域イノベーション研究会」を発足、大分地場企業のイノベーションを勉強させてもらっています。また、女性起業家や女性リーダーにもお会いし、パワーのすごさを身近に感じています。

また、四半世紀ぶりの故郷となるためとにかく大分のことを学びなおそうと、各種情報に目を通したり、郷土資料コーナーが常設されている図書館に通つたりもしました。何から何まで新鮮でしたし、強力な産業政策とともにモノづくり県としての立ち位置などをあらためて確認することもできました。

目の「ユニバーサルデザインと人にやさしい社会」では四極会の大先輩が社会人聽講され、さすがに緊張しましたが何とか無事終了。四極会寄附講義「企業研究では時間がゆるす限り聽講させてもらいました。お忙しい中、諸先輩方や後輩たちの熱く講義される姿にはただただ頭が下がるばかりでした。

しております。なかでも、経済学部90周年の折には勤続を顕彰して頂き誠に有難く大変感謝申し上げております。

また、大羽先生のご後任の先生方に大分のグルメ処にご案内頂いたり、社会人大学院の皆さんに別府の温泉に連れて

ら大分大学でも話してよとお誘いを頂きました。爾来、今年で15年間非常勤講師として企業リスクマネジメント論の講義をさせて頂いております。

のです。当時、私はリスクコンサルティングの仕事をしており、大分大学さんのリスク洗い出しのお手伝いをする機会を頂戴しました。その折、ご専門の大羽教授（現名誉教授）の研究室にご挨拶に伺い、色々お話をしている中で、私が慶應大学でリスクマネジメントの講義をしていくと申し上げましたところ、大羽先生から

平成16年4月、大分大学が国立大学法人化された時から私の大分大学さんとのご縁が始まりました。法人化の下で、これまでの国家賠償責任法の枠組みから自己責任に移行するという大転換が図られる中で、全国の国立大学では一斉に自ら抱えるリスクを分析し保険対応を進めな

特別寄稿 一般財団法人四極会事務局  
(大21回) 高橋 秀武

大学院の地域貢献

行つて頂いたりと、今ではすっかり大分ファンになつております。とくに、温泉とフグは大分に惹きつけられる大きなパワーの源泉となつております。今度はどこの温泉に行こうかなどと楽しみにしている次第であります。

企業リスクマネジメント論の講義につきましては、企業事件のケーススタディを中心に取り組んでおります。この15年間法制や統制の仕組は大きく変わつて参りましたものの、企業事件の発生は相次いでおり、講義テーマに事欠かないのが実情であります。大分大学さんとのご縁を大切にしながら、これからも学生の皆さんと企業事件はどうすればなくなるか考えて参りたいと存じます。今後とも何卒宜しくお願ひ申し上げます。





統計を用いて県内大学の地域貢献について調べたことがあります。平成28年3月に県内の高校を卒業して四年制大学に進学した3730人のうち、約四分の一近くも上昇しています。県民のための地域の教育機関としての役割が高まっていることを意味します。

また、平成28年3月に県内の大学を卒業して就職した県内高校出身者685人のうち71・4%に当たる489人は大分県内に就職しました。県内社会への人材供給機能も大きいと言えます。

このように県内大学が進学する地元高校生の受け皿として、また地域に人材を供給する高等教育機関としての高い役割を果たしているのは、おそらく大分県に

限つたことではないでしょう。地域が底力をつけるためにも地方大学の定員増が求められます。

それでは大分大学経済学部の大学院はどうだろうかと気になるところです。残念ながら前記の統計では大学院が対象になつていませんので、何か手掛かりはないかと昨年10月に改訂された四極会の新しい会員名簿を繰り返してみました。平成29年までの10年間に大学院を修了した193人のうち、名前から留学生と思われる人及び現住所が未確認または非掲載となつている人を除いた89人の現在の住所は、大分県内74人、県外15人となっています。つまり、日本人修了者の8割以上は県内に住んでいます。社会人に門戸を開いたこともあり、大学院は専門職業人を養成し、地域に供給するという目的を十分に果たしているといえます。

何よりの地域貢献は、大分に居ながらにして大学院に進み、世代を越えて留学生を交えて真剣に学ぶ得難い経験を積まれたOBの方々が、大分に残つて社会と経済をリードしていることです。青雲会は四極会の誇りです。

シルバー留学と「惻隱の情」

特別寄稿 九峰会  
別府溝部学園短期大学 副学長  
福祉社会科学研究科福祉社会科学専攻  
1期生 溝部 佳子

一昨年、ハワイへ3か月、シルバー留学をしました。表向きは、アメリカの福

祉を学ぶため。日本に戻って、あの時に出会つた、ハワイ在住の二人の日本人女性が、何故そこまで私にしてくれたのかズームト考へ続けていました。

すると、昨年の8月ラジオで、今、日本人の中から消えつつある言葉として「惻隱の情」が話題になつていました。この言葉は、日本人が古くから大切にしてきた言葉で、一般的に「思いやりの心」と言われていますが、「惻隱の情」と「思いやりの心」は違うのです。私も、これから話す出来事に出会うまでは、「惻隱の情」の本当の意味を知りませんでした。

シルバー留学ですから、ホームステイ先は65歳以上、日系2世の75歳の房夫と74歳のジャスミンの家。場所は、学校のあるホノルルからバスで1時間半のハワイ。毎朝5時に起き、6時30分のバスに乗り学校に通いました。クラスメートは、10代から20代。私は英語が苦手なので房夫を当てにしていたところ、なんと彼は英語オシリ、ジャスミンは片言の日本語OKでした。はじめは楽しい日々



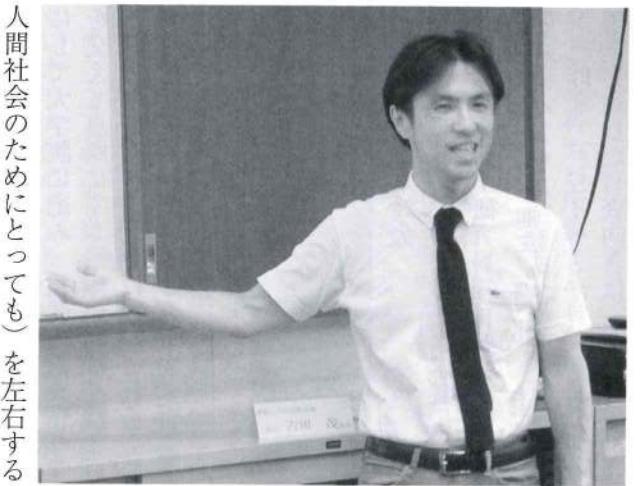
でしたが、だんだんジャスミンとの溝が深まり、洗濯機は壊れやすいので使用不可、シャワーは3分以内、食事はほとんどマクドナルド、テイクアウトの時は私が小さいのでキッズミール。ただ、言葉の壁もあるので、最後まで居続けると決めていました。残念ながら、学校にとつてホームステイ先は大切な財源です。何の説明もないままで、急にハワイ大学の寮へ移るよう言われました。その不安で一杯の時に、支えてくれたのが二人の日本人女性でした。

一人はヨガで知り合ったハワイ在住16年の久美子ちゃん。私に急な引っ越しが必要になつた時、ハワイイカイまでタクシーで4、5万かかる距離を車で一緒に行つてくれ、オロオロしている私を見かねて必死で荷造りをしてくれました。

もう一人が、ジャスミンの義理のお姉さん、沖縄生まれのみこさん。いつも私のことを見守つてくれ、我が家を出た後、ワザワザ、御夫婦で学校に出向き「佳子は何も悪くない、妹が情緒不安定なのだと。その時、学校のスタッフは妹さんの味方をしに来たと思ったそうです。そのお陰で、ホームステイ代が半額となり、

ハワイ大学の寮費も無料となりました。それ以上に嬉しかったのは、私の日本人としての誇りと名譽が保たれたことです。出会つて間もない私のために、行動してくれた久美子ちゃんとみこさん。今振り返ると、彼女たちは、やむにやまれぬ、居ても立つても居られない、行動を伴う思いやり「惻隱の情」があつたのです。「惻隱の情」とは、行動を伴う思いやり、ただ相手を思う気持ちだけではないのです。シルバー留学で出会えた古き良き日本人、ハワイという、地位や肩書の通用しない世界だからこそ体験できた出来事。日本人として守り、若者に伝え続けたい「惻隱の情」。

ハワイ大学の寮費も無料となりました。それ以上に嬉しかったのは、私の日本人としての誇りと名譽が保たれたことです。出会つて間もない私のために、行動してくれた久美子ちゃんとみこさん。今振り返ると、彼女たちは、やむにやまれぬ、居ても立つても居られない、行動を伴う思いやり「惻隱の情」があつたのです。「惻隱の情」とは、行動を伴う思いやり、ただ相手を思う気持ちだけではないのです。シルバー留学で出会えた古き良き日本人、ハワイという、地位や肩書の通用しない世界だからこそ体験できた出来事。日本人として守り、若者に伝え続けたい「惻隱の情」。



## 求められる幼児教育・保育 界における経済学的視点

特別寄稿 九峰会  
大分大学大学院福祉社会科学研究科  
10期生（大43回）吉田 茂

大分大学大学院経済学研究科同窓会「四極青雲会」の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。私は大分市にあります、ふたば保育園の園長をしております。当業界について少しご紹介しますと、近年、幼児教育・保育の「質」が大きく問われるようになりました。アメリカの経済学者ヘックマンの研究にて、人の将来の幸せな生活（個人的生活のみならず

人間社会のためにとつても）を左右するのは幼児教育・保育が大きく影響していることが明らかにされました。この研究は、世界中で幼児教育・保育への関心とその重要性の認識に貢献し、各国で幼児教育・保育に対する施策強化が行われるようになりました。韓国では日本よりも先に幼児教育無償化を実現させ、幼児教育・保育に力を入れるのはもはや欧米のみならず隣国にまで及び、早急に日本としての対応が望まれる中、日本でも幼児教育の無償化などを含んだ幼児教育振興法の成立など施策強化に向けて現在、多くの議論がなされています。

私たち幼児教育・保育現場でも、「質の向上」とは一体どういう実践を示すのか、多くの研究と議論、そして検証が行われているところです。

貴同窓会修了生の皆様は、日々仕事や研究活動を通じ、日本や地域における経済

社会に係る諸課題に関してその解決のために奮闘、そして活躍されているとうかがっております。

私は、幼児教育・保育の現状や動向と経済社会は密接に繋がっていると考えています。今後、幼児教育・保育の諸課題を見つめる新たな視点として経済学的視点は欠かせないでしょう。いつか皆様からたくさんのご示唆をいただきたい、そういう心から願っております。

最後に、貴同窓会の益々のご発展を心より祈念致しまして、寄稿を締めたいと思ひます。ありがとうございました。

## 図書館の醍醐味

久留米大学商学部教授  
久留米大学附属図書館長  
1回生 高橋 真一

昨年の4月から久留米大学の附属図書館長を拝命する身としては、図書館や資料館などの役割について考えることが、以前にもまして多くなった。私は大学図

論吉が訳した『帳合之法』（1873年）なども含まれる。同会計士事務所は、直面する難題の解を先達の知見に依拠しようとしたのである。



その図書館の機能が大学に限らず、近年、急激に変化している。かつて図書館は自ら足を運び、書物を借り、書物と議論する場所であった。しかし、昨今、電子図書などの導入により、自宅で書物や資料などを検索でき、読むことができるようになった。もちろん、図書館の利用の仕方はそれぞれの専門分野や研究スタイルなどによって異なるが、「ハーヴィード文庫」のように、何百年も昔に書かれた文化財としての価値をもつ書物に自ら触り、これを手にとつて見たり（もちろ

書館を、研究者が真理の探究にいそしみ、学部生や大学院生は知を育成し、そして、地域社会にとつては、これまでに蓄積された社会の知を共有する重要な位置付けている。

## “Reflections on Japanese Education, then and now.”

Simon Peter BAHAU バハウ サイモン ピーター

パプアニューギニア独立国出身

Hailing from Independent State of Papua New Guinea (PNG)

Undergraduate School 36<sup>th</sup> Batch (March 1988)

Graduate School 12<sup>th</sup> Batch (March 1990)

To my dear Seiun-kai and Shiwasu-kai Oita University Graduate and Undergraduate Schools of Economics Mentors, Alumni Seniors, Colleagues, Juniors alike: Greetings from the heart to one and all.

I am Simon Peter Bahau, a 36<sup>th</sup> Batch Undergraduate School and 12<sup>th</sup> Batch Graduate School Alumni member hailing from beloved homeland, The Independent State of Papua New Guinea. I passed out in the undergraduate in March 1988 and graduate school in March 1990. I then straightaway worked for a manufacturing firm in Osaka for 10 years before joining the Ritsumeikan Asia Pacific University (APU) in February 2000 when even the cafeteria was not completed for students to start up in April that year. Since it was the big news then, I felt much pride to be a part of this international undertaking on Bungo Land from scratch. I worked with APU on both administrative and academic capacities for 12 years till March 2012. I then took a sabbatical break and worked with the Japan Sun Industries in Beppu for almost a year before taking up my current position at The University of Toyama in April 2013.

In my current workplace, The Center for International Education and Research (CIER) at The University of Toyama, I support and assist both the inbound international students and the outbound domestic or Japanese students. Acculturation in studies and life for the international students while revisit to the Japanese language and rediscovery in preparation for eligibility for outbound Japanese students is my charge added with general education subjects of Japanese affairs and culture and intercultural communication and international education and cross-cultural understanding for future teachers in the Faculty of Human Development Sciences or Education. All these were parts that I personally missed when I first came to Japan. It is an honor to be able to provide these very essentials to the students in need.

Japan itself was very much respected in terms of its progression as an advanced nation until recently. The economic trends have really taken their toll on the nation, thus leaving much to be desired for, especially in its planning for the global era where Japan seems to still lag and struggle behind. This phenomenon shows clearly in the decreasing number of its own outbound students. Sad to say, but the trend is obvious even in my current workplace, too.

On another note, English language education in Japan is also said to be lagging way behind. The practicality of the Japanese people being unable to communicate in English has in somewhat contributed to the nation's backdrop in the global arena. However, personally, thanks to that stance, non-Japanese persons teaching English here do have a source of employment and income despite the fact that they may not actually qualify for the jobs.

On the contrary, the lack of English communication by the Japanese has also been one of the major contributing factors to Japan being able to maintain and sustain most of its unique culture, customs and traditions which would most probably have disappeared a long time ago had the Japanese opted to introducing English as one of their official languages after it surrendered. I for one am heartily grateful because I have benefitted from Japan not only as a scholar since my arrival in Japan but then on have undertaken teaching of the English language since a sophomore in 1985. As mentioned earlier, I now work for this former national university, where I support and assist similar international students in their acclimatization in Japan while also assisting the domestic or Japanese students in revisiting their mother language and rediscovering homeland whether they opt to venture out into the wider world or take on visiting inbound tourists and alike.

Lastly but not the least, I wish to extend my sincere gratitude to the executive of the alumni associations of Seiun-kai and Shiwasu-kai for allowing me to share my unworthy reflections with all of you. I feel very blessed at having passed out through our alma mater, Oita University's undergraduate and graduate schools of Economics. Should I be able to contribute in any way for our beloved alma mater and alumni, it would indeed be a dream come true and a blessing in disguise.

Thanking one and all for making time to read to the end.



2年ほど前に、旅行で訪れたヨーロッパのことを少し書いてみたい。1週間ほどでドイツ、スイス、フランスを周遊したのだが、まず驚いたのが国境をまたぐたとえ入国審査も何もなく、ただ交際機関で国境をまたぐだけであった。聞いたところでは列車で移動したわけだが、ツアーリーたとえば、シエンゲン協定なるもののおかげで自由に国境を行き来できるとのこと

高橋清人税理士事務所  
17回生 石川 秀幸

## 国外に出てみて思うこと

ん読んだり）する醍醐味、あるいは書架をそぞろ歩きする中での偶発的で運命的な書物との出会いなど、その場でしか味わえない知との触れ合いが図書館にはある。簡単に手に入らない知を探しに、図書館に足を運んでいただきたい。

だつたが、これでセキュリティは大丈夫なのかと不安に思つた。帰国後、2ヶ月も経たないうちにパリ同時多発テロが起きてしまつた。海に囲まれた日本であつても、今のような治安が保てない日々がやってくるのもそう遠くないかも知れない」とその時感じた。

フランスでは、日本人観光客がこぞつて訪れるモンサンミッシェルの地で1泊したのだが、運悪く、老朽化した配管のおかげで水回りのトラブルに巻き込まれてしまつた。そこで起きた「部屋を替わる替わらない」の交渉で宿の女主人と押し問答になつた。もう少しで、先方の都合に押し切られた。そうになつたが、こちらの主張を激しく身振り手振りで伝え、なんとか意図を通した。自己主張することの大しさを思い知られた一件だつた。

また、同じくフランスでは、交通機関の突然のストにもびっくりした。添乗員いわく予告もなく突然起きるらしいが、かの国の労働者からすれば「雇う側が本当に困るくらいでないとストの意味がない」らしい。こういう考え方はなかなか日本人には理解しがたい。

たしかに旅行で数日滞在しただけだったが、国民性の違いや、治安の良し悪し等を感じることができ、とても興味深かつた。素晴らしい景色や、歴史ある建造物を見てまわることが出来たことももちろんよかつたのだが、現地に行つてこそ肌で感じることが出来る、「その国独特の考え方や習慣」にわずかでも触れることができたのは非常に貴重な体験であった。

だつたが、これでセキュリティは大丈夫なのかと不安に思つた。帰国後、2ヶ月も経たないうちにパリ同時多発テロが起きてしまつた。海に囲まれた日本であつても、今のような治安が保てない日々がやってくるのもさう遠くないかも知れない」とその時感じた。

フランスでは、日本人観光客がこぞつて訪れるモンサンミッシェルの地で1泊したのだが、運悪く、老朽化した配管のおかげで水回りのトラブルに巻き込まれてしまつた。そこで起きた「部屋を替わる替わらない」の交渉で宿の女主人と押し問答になつた。もう少しで、先方の都合に押し切られた。そうになつたが、こちらの主張を激しく身振り手振りで伝え、なんとか意図を通した。自己主張することの大しさを思い知られた一件だつた。

また、同じくフランスでは、交通機関の突然のストにもびっくりした。添乗員いわく予告もなく突然起きるらしいが、かの国の労働者からすれば「雇う側が本当に困るくらいでないとストの意味がない」らしい。こういう考え方にはなかなか日本人には理解しがたい。

## 「戌年」に思う

税理士

18回生 清末 和弘

今年は平成も限られる最後の「戌年」である。私は今年程、この干支を感慨深く感じたことはない。というのも平成14年に生まれて一ヶ月余りで実家で飼うことに生れた愛犬ラブラドールの「権太(ゴンタ)」が昨年11月に15歳の誕生日を目前にして逝去したのである。権太は実を言うと私が税理士を目指して孤独にも勉強していた頃からの心の支えとなつて傍に居てくれた存在だつた。

イギリスのことわざに「子供が生まれたら犬を飼いなさい」というものがある。「子供が生まれたら犬を飼いなさい。子供が赤ん坊の時、子供の良き守り手となり、心の支えとなつてくれた。その存在感たるや亡くなつた後になつても甚だ大きく、恐らく自分の命ある限り持続するに違ひないとと思う。

私自身もこの世に親から生を受けた以上何かしら果たす役割というものはあると思う。それはきっと命を懸けて、人生を懸けて一つ一つの糸を紡ぐが如く果たしていくものであろう。権太が傍に居てくれたように。そして誰かの心の一隅にほんの少しの灯火でも照らすことのできるような存在になれたら良いのだが」と改めて実感している。

なるでしょう。子供が幼少の時、子供の良き遊び相手となるでしょう。子供が少年期の時、子供の良き理解者となるでしょう。そして子供が青年になつた時、自らの死をもつて子供に命の尊さを教えるでしょう。そして子供が青年になつた時、自らの死をもつて子供に命の尊さを教えるでしょう。

これは何も子供のみに限らず、私や親の世代においても同様の深い思いを与えてくれた。

今思えば権太は、当たり前のことではあるが私に声を掛けて何かを語りかけてくれた訳ではなく、黙つてただ傍に居てくれただけなのであるが、本当に言葉では言い尽くせない程の心の癒しであつたり、心の支えとなつてくれた。その存在感たるや亡くなつた後になつても甚だ大きくなるでしょう。

私はこの世に親から生を受けた以上何かしら果たす役割というものはあると思う。それはきっと命を懸けて、人生を懸けて一つ一つの糸を紡ぐが如く果たしていくものであろう。権太が傍に居てくれたように。そして誰かの心の一隅にほんの少しの灯火でも照らすことのできるような存在になれたら良いのだが」と改めて実感している。

## 医療福祉にどっぷり

大分県議会議員

25回生 土居 昌弘

人は必ず死にます。しかし、いつ死ぬかわかりません。不慮の事故死もありえ

ます。ただし、そのような突發的で残念な死は迎えたくない、昔の人は「畠の上で死にたい」と願つたものです。ところが現在、日本の社会では病院で亡くなる方が圧倒的に多い。病院での看取り率が世界一なのです。しかしながら、2030年には47万人の看取りの場が不足する見通しを国は示します。

日本の医療は治療を徹底的に追求してきた。病気と闘い、そして最後は死と闘う。その結果死を迎える舞台は病院となりました。医療側の1分1秒でも生きさせる延命医療は当然で、それが不要になつても終了できない環境ができあがり、そのなかで様々な管につながれ、患者は最期を迎えます。



が痛むので、医者に「せめて点滴ぐらいは」と懇願します。しかし、ここで考えなければならぬのは、本人が本当にそう望むだろうかということです。

本来、病院は死ぬところではあります。治療を尽くして、家に帰すところです。そして、自らの暮らしのなかで、自らの死という人生最大の出来事に向かつて考えること。老いや死をしつかりと見据え、最期までどうよりよく生きるかを考えることが大事です。

大分県は、自宅で亡くなっている人の率が8・1%で、全国最低。この問題は、実は私達の問題なのです。そこで只今、私は大分県福祉保健環境調査会の会長として奔走中。在宅医療や在宅での看取りに取り組む医師たちに調査を依頼し、大部分はもちろん、福岡や愛媛などにも足を伸ばして、その実態の把握に努めています。当然のことながら、大分県医師会にもお世話をっています。

これまでの医療福祉の政策が足りず、「病院で死ぬのは当たり前」になってしまっている現状を改善し、県民がこれから将来に安らぎを持てるよう、執行部と議会で知恵を絞っていきます。

## 守るべきもの

大分県議会議員

25回生 後藤 慎太郎

(※この文書内における「コメつくり」とは、いわゆる百姓や農家という概念とは違いますので、あらかじめご了承ください)



さい。

「県内農業集落の6割 水田経営担い手いない」といわれています。

要約すると、「コメつくりの高齢化」と「その後継者不足」が非常に深刻で、将来的には集落維持と農地保全は極めて厳しいということです。

ちなみに県内の耕地面積(5万6900ha)の7割(4万500ha)が水田なのですが、わが県はいわゆる中山間地域が多いため、近代のコメつくりには不向きな条件不利水田が多く存在します。

わが県におきましては、野菜づくりの新規就農者の獲得や県内外からの企業参入などは全国でもトップクラスの成果をあげていますが、「コメつくり」はほぼ皆無です。

それはいったいなぜでしょうか?もうみなさん、おわかりのことだと思います。「コメつくり」は儲からないからです。

誤解のないようにいいますと、「中山間地域におけるコメつくり」が儲からないまま、自然豊かな四季の中で暮らし、生まれて、自然豊かな四季の中でも暮らし、命が尽きていくまさにそのものではないのでしょうか?

ですから、「コメつくり」には儲かるとか、儲からないとかの議論はふさわしくないのだと思うのです。

私たちがその瑞穂の国らしい息吹を感じる伝統や伝承とは、確実にその「コメつくり」とともに脈々と根付いてきたはずです。

そうしたことから「中山間地域のコメつくり」とは、行き過ぎた新自由主義、いわゆるTPPの枠組みの下ではますます成り立たなくなるものの典型的な例でしょう。

はたしてそれでよいのでしょうか。

「コメつくり」が守るものは、すべてが公共の財であると私は考えます。

私が考える公共の財とは、緑多き里山の風景、美しい水の流れる河川、そして

いから、といったほうが正確かもしません。

紙面も限られますので、單刀直入に述べますが、私が好んで使う「コメつくり」とは「水田農業経営」とは異なります。

話を戻しますが、儲からないからという理由だけで「コメつくり」がいなくなつたのはほん間違いない理由であると私は思うのですが、しかし本当にこれだけの理由で私たちの国の将来は大丈夫なのでしょうか。

私自身は「コメつくり」を創り続けることはもはや国策だと思っています。「コメつくり」が必要なのです。

つまり、「中山間地域におけるコメつくり」とは、この日本という瑞穂の国に生まれて、自然豊かな四季の中で暮らし、命が尽きていくまさにそのものではないのでしょうか。

ですから、「コメつくり」には儲かるとか、儲からないとかの議論はふさわしくないのだと思うのです。

我等3人 我等3人とは土居昌弘県議会議員(竹田市)、後藤慎太郎県議会議員(大分市)、そして私こと竹田市議会議員の井英昭のことです。我等は平成13年入学の25期生。その25期生は大体30人くらいで、留学生、学部から進学、社会人がそれぞれ1/3

豊かな食材などです。  
それらの存在は、「コメつくり」がいたからに他なりません。

しかし、頑なに守ってきたものが滅び行くのはあつという間です。些細なことから滅びていきます。

「コメつくり」がいなくなった地域に耕作放棄地が増えていく様子がそのことを語ってくれる気がするのはただのでしゃうか。



竹田市議会議員  
我等3人

25回生 井 英昭

ずつだったように記憶しています。今もそうだと思いますが、特に前期はお互いにお見知りの時期で、講義前後の職業的質問タイムを通じて親交を深めていきました。そのうち25期の社会人組、特に故長谷川哲三氏が中心となり青雲会の原型となるような雰囲気が出来てきたことは以前もお伝えしました。

在学中は同期の皆さんや先生方と喧々諤々、経済やら政治やら色々なことを議論しました。議席をいただいた今、その時の議論が身になってると振り返る事ができます。更に今は青雲会員の皆さんにお会いする度に発奮させられます。このエネルギー感は青雲会ならではだ！

さて、来年は統一地方選という政治の世界の一大イベントが行われます。県知事選と同じ投票日の県議選に2人の県議も再選を目指し闘うと聞いています（ちなみに私はその2年後）。党派・会派はそれぞれ違えど、共通するのは四極会青雲会所属！大分の政治経済を結ぶ核となり、地域の発展を目指す方向性は全く同じです。

我等3人とも青雲会員として地元の政治経済にしつかりと根を張り、会員の皆さんからの叱咤激励で太い幹となるべく育てていたとき、更に大きく枝を広げるため政策的実現で活躍することが使命と考っています（僭越ながら長い付き合いなので県議2人も同じ想いだと確信して勝手に書いています）。

平成13年入学組25期生の3人はふるさとのため大分のため働きます。どうぞ更名为なるご指導ご鞭撻をよろしくお願ひします。

## 看護学教育と プロジェクト活動

大分県立看護科学大学 教授  
成人・老年看護学研究室

25回生 小野 美喜

同窓生の皆様のご活躍をいつも感嘆しながら拝見しております。大学院を修了して早くも15年が経過したのだと改めて感じ、筆をとらせていただきました。

私は大分県立看護科学大学の助手時代に経済学研究科で学ばせていただき、修了後に所属する大分県立看護科学大学の博士後期課程に進学しました。ずっと看護学教育の中で仕事をしてきた私にとって経済学で学んだことは大変有意義でした。



## 中小企業を支援し、 地域活性化を目指す

佐伯市番匠商工会 経営指導員  
34回生 川津 大樹

皆さんは、「商工会」をご存知でしょうか。商工会は、各種施策を通じて、中小企業・小規模事業者を支援する地域総合経済団体です。商工会議所が全国各都市に設立されたのに對して、商工会は、主に町村部に設立されており、大分県内には現在17の商工会があります。私が現在在籍する佐伯市番匠商工会も、旧南海部郡の4町村（弥生町・本匠村・直川村・宇目町）に存在した商工会が合併し誕生しました。

さて、商工会の仕事には、「地域振興

た。修士時代に読んだドラッガーの本は今も私の目の届く書棚にあり、日々の仕事を翻弄されるなかで、組織の中での仕事をすること、リーダーシップとは何かを考える一時を与えてくれています。

私の所属する大分県立看護科学大学は、医師が不足する地域医療で、患者さんが自宅で生活を継続できる社会実現のため、看護師の裁量範囲の拡大をめざしてプロジェクトを前学長の下に平成17年に立ち上げました。私はその一員として、多くの同士と共に教育・研究に携わり、2014年に「地域医療介護総合確保推進法」が可決した経験を得ました。法律によつて、厚労省の指定教育を受け、質を保障された看護師は、医師不在の場合でも包括的な指示の下で、判断力や侵襲が伴う「特定行為」を実施できるようになりました。つまり看護師の裁量範囲の拡大が実現したのです。これにより、緊急の場合でも患者さんに一定の処置を提供できます。しかし地域の医療ニーズに応えるためには、まだ改善が必要と感じ、法改正による看護師の仕事を検証しながら先を目指しているところです。

このようなプロジェクトに係り、ビジョンの示し方、企画力、組織の動かし方は、大学院時代での学びが大変いきます。そして、何を動かすにしても経済だということも実感しています。他領域で活動する同窓生の皆様が今回の活動にお力を貸してくださいのも心強く感じ、感謝する日々です。今後もどうぞ看護へのご支援下さいますようお願い申し上げます。



事業」と「経営改善普及事業」という2大事業が挙げられます。地域振興事業とは、行政と連携し、地域活性化に繋がる取り組みを行うものです。大分県下には、玖珠祇園大祭や杵築市城下町健康歩行ラリー大会といった様々なお祭り・イベントが存在しますが、これらのイベントの主催者もしくは運営協力団体として商工会が携わっているものが多くあります。佐伯市番匠商工会も、「番匠商工祭」というお祭りを毎年8月、道の駅やよいで開催しています。番匠商工祭は、青年部が企画運営を行っており、私も青年部担当としてお祭りの運営に携わりました。一方、経営改善普及事業とは、中小企業が抱える経営上の課題解決に取り組むものであり、金融、税制および労働など経営全般にわたって、会員企業の皆様に様々なサポートを行っています。特に近年は、中小企業政策の見直し・小規模事業者支援に重点シフトしてきたことで、「ものづくり補助金」や「小規模事業者持続化補助金」など、中小企業や小規模事業者に対する新しい支援策が登場してきます。このような中小企業向けの制度を会員企業に提案し活用してもらうことで、商工会の役割は高まっています。

商工会の「地域振興事業」と「経営改善普及事業」は、お互いが密接に関係する両輪の関係です。「地域の主役は、地元の中小企業であり、中小企業が元気になることで、地域活性化に繋がる」と信じて、中小企業を支援し、地域活性化を目指していきます。

## 修了後5年間を振り返つて

有限会社 小野興産 経理担当

35回生 田中 啓太

大分大学大学院を修了し、5年が経ちました。修了後は大分県日田市で、両親とキノコを作りながら生活しております。たが、平成29年7月の北部九州豪雨の影響を受け、45年間続いた家業を廃業することとなりました。5年間という短い間でしたが、経営に関わりながら失敗したこと、学んだことをこの場を借りてご報告したいと思います。

私の第一の失敗は、従業員が私の指示



通りに動かないことに腹を立てたことでした。従業員に腹を立てるとは、私が影響を与えることのできない領域に手を伸ばすような行為でした。対して、私が影響を与えたのは、私自身が主体性を持ち、自分と従業員とで行う作業に集中すること、そして、作業が円滑に行える環境を整える、ということだったようになります。私の第二の失敗は、他人を頼らず、自分自身の力のみで事にあたるうとしたことです。自分自身の力やスキルを高めることは、とても大事なことだと思います。しかし、大きな成果を残そうと思えば、パートナー、従業員、取引先、そしてお客様との協力関係と信頼関係が、必要不可欠であると痛感しました。次に、企業として大切なと感じたことをいくつかご報告したいと思います。まず、明確さは力である、ということです。事業計画、キャッシュフローの計画、生産計画、販売計画、労働力の計画、そして日々の仕事について、これらを明確に段取りする力が、企業の力そのもののように感じました。

また、計画を実行・改善する段階では、現在の結果が気に入らなければ、なんでも良いから変えてみるということを意識しました。特にボトルネックを発見し、企業の能力を制限している工程や事柄を取り除くことができれば、企業はまた一つ強くなるのではないかでしょうか。

最後に経営に関わる中で、学んできたことの根幹には、大学院での勉強と経験がありました。これは、先輩方と、先生方のご指導の賜物であると心から感謝しております。

## 夢の実現に向けて 学んだこと

別府大学国際経営学部国際経営学科 助教

38回生 上野 恵美

1.はじめに

大分大学大学院経済学研究科博士前期課程を修了して2年が過ぎた。現在私は、大学生時代に抱いた大学教員になるという夢を実現させ、日々研究や学生指導に励んでいる。本稿では、私が大学生時代、そして大学院生時代を通して学んだことについて報告する。

2.

大学生・大学院生時代に学んだこと

大学生時代の4年間を通してのゼミ活動は、私が現職に就くきっかけとなつた。マーケティングのゼミに所属し、プレゼンテーションによる研究発表やディスカッションを繰り返す中で、自分の知識やプレゼンテーション能力が身について



いくことが自信につながり、研究することが楽しくなった。また、指導教員が熱心に学生を指導している姿を見て、強い憧れを抱くようになった。そして、大学3年生になり就職活動を行いながら、大学教員になるという夢を膨らませ、大学院に進学することを決めた。

4年制大学を卒業後すぐに大分大学大学院経済学研究科に進学した私は、入学当初から研究に打ち込んだ。しかし、入学当初大きな壁にぶつかった。学部生時代の学習とは違い、より専門的な分野を追求する大学院のスタイルに追いつくことができなかつた。毎日朝早くから夜遅くまで授業に研究と続く毎日、強い不安や焦りを感じた。また、研究も思うようには進まず、テーマ絞りや研究の進め方に戸惑う日々が続いた。そのような中で、現在の自身の研究分野である6次産業化を研究するきっかけを作つて下さったのは、大学院生時代の指導教員である。大分県の一村一品運動に関する現地調査やセミナーに同行させて頂いたことで、これまで文献を用いた研究を進めてきた私にとって大変刺激になつた。実際に一村にインタビューをして直接意見を聞くことにより、文献調査では感じることのできない思いや熱意というのを感じることができた。研究のヒントとなる資料収集も行うことができ、大変貴重な体験をすることができた。

### 3. おわりに

大学生時代に思い描いた研究者になるという夢を実現させることができた私であるが、学生時代に学んだことを生かし

て今後も研究を行つていきたいと考えている。私の学生時代の経験は、今後の糧となる出来事であり、6次産業化の取り組みに携わっている生産者の方々の声を直接聞くということは、これから研究を進める中で大切にしていきたいと考えている。

最後になるが、私の研究の方向性を示して下さった大学生時代・大学院生時代の指導教員には大変感謝している。心より御礼を申し上げたい。

## 3つの幸運

経済学研究科博士後期課程在籍  
児玉成夫税理士事務所

39回生 西本 山海

私は、社会人として2015年4月に大分大学大学院経済学研究科博士前期課程に入学しました。入学から



手前が鵜崎先生、後ろが私です

2017年3月までの2年間、本当に楽しく好きなことを研究することができました。今振り返つてみると、偶然にも「3つの幸運」が、自分のもとに舞い込んでいました。皆、租税に関する研究という共通の目的をもつていました。毎週のゼミでは、その共通の目的意識のもと、皆の知識や経験に基づいた見識に触れることができ、相当な刺激を受けました。お互い励ましあいながら、一歩ずつ前に進むことができました。本当に感謝しています。皆との飲み会も、とても楽しかったです。

2つ目の幸運は、指導教授である伊藤先生や白木先生をはじめとして、専門的で優れた知識と教養を兼ね備えた本当に素晴らしい先生方に巡り合うことができたことです。論文作成にかかる膨大な知識と教養について、わかりやすく、かつ丁寧に楽しくご教授していただきました。先生方から受けたご厚情は、私の生涯の宝物です。本当に感謝しています。もちろん、先生方との飲み会も楽しかったです。

3つ目の幸運は、大分大学図書館図書企画係の佐藤様や立花様など、優しくて明るい職員の方と知り合うことができたことです。佐藤様や立花様の勧めもあり、ライティング・サポート・デスク(WSD)にチユータとして携わることができます。WSDでは、学部生を対象としてその指導をするためには、自分自身がそ

れについて精通していなければなりません。結果的に、レポートや論文作成のための思考法や作成技法などについて勉強することができました。本当に感謝しています。当然、飲み会も楽しかつたです。私は、現在、社会人として2017年4月から大分大学大学院経済学研究科博士後期課程に進学しています。鵜崎先生のご指導のもと、素晴らしい同期の仲間である栗林様とともに、コーポレートファイナンスなど管理会計について研究しています。引き続き、WSDにも、チユータとして携わることができます。どうやら、「3つの幸運」は、現在も進行中のようです。

## 私の趣味

経済学研究科博士前期課程在籍  
株式会社ISS 代表取締役

現役院生 青山 智幸

私は平成27年4月経済学研究科博士前期課程に社会人入学し、現在松隈教授のゼミに所属し3年目になります。ちょうど3年前に義母が癌を患い、これを機に温泉の素晴らしい別府に引越してきました。私には、幾つかの趣味がありますが、20代から始めた趣味で唯一続いているのがダイビングです。大分に引越してくるまでは、年に1~2回旅行を兼ねてダイビングに行くのが楽しみでした。最近では、時間が自由に取れるようになります。特に最近のお気に入りがパラオ

から20~30メートルの所まで上がつて来ます。そして、産卵のピークには数千匹の群れになります。棚一面が魚の群れに覆われます。またここでは、あまり群れを作らない大型のアジであるロウニンアジが群れを作ります。これらも、ワイルド好きにはたまりません。ダイビングをされる方は是非パラオを訪れて、素晴らしい海の世界を堪能して下さい。



右から2人目が筆者



私は昔「旧満州」と呼ばれていた中国の瀋陽に生まれ、来日してもう25年が経ちました。昨年4月に経済学研究科に入學し、所属は経済史演習で、社会言語学分野に關わる研究に取り組んでおりました。現在、別府溝部学園短期大学においております。

この5年間を振り返ってみると、ちょうど日中関係が新世紀に入つてから最も厳しい時期でした。尖閣諸島の領有権を巡る緊迫した状態が続き、政治・経済関係のイベントが次々に延期・中止に追い込まれていた時期に、母国を離れ、異国の方で頑張っている同胞たち、県内各大学の中国出身の留学生に呼びかけて、「春節」を通した親睦交流、日中両国の文化交流の場を企画して参りました。

県内各大学の中国人留学生と中国に興味を持つ日本人学生、地域の方々のご尽力のお陰で、小規模な祝会を千人以上集まる大きなお祭りに作り上げることができました。大学も國も異なる若者同志の学びあう、新しい交流の場が生まれ、ドイツ、スリランカ、ネパールといった国々の留学生もボランティアとして春節祭の舞台を盛り上げています。

この「春節祭」は単に地域の方々に喜んでもらうだけでなく、県内在住する中国人子女に母国の伝統文化を知るよい機会となっています。冷え込む日中の政治的関係にもかかわらず、この取り組みは平和を願う民間活動の一端として、大分県に在住する中国人と地域との共生社会構築の一助になつたと確信しております。



「人生100年時代」なのだそうである。流行のきっかけは『ライフシフト』<sup>①</sup>なるほど、誰も長生き出来ると聞いて悪い気はしないし、今後まだ何十年も元気で頑張れるのであれば、もうひと花もふた花も咲かせようという氣にもなるものだ。現政権も目敏く「人生100年時代構想会議」を立ち上げ「人づくり革命」に余念が無い。しかし、ふと気がつくと高齢化は日本の大問題であり、このままでは日本は衰退していくという話では無かつたか? ふるさと大分を見回しても過疎化の波は至るところに押し寄せ、学校は統廃合の一途である。

## 人生100年時代

現役院生 井上 桂太郎

大分県庁OB  
経済学研究科博士後期課程在籍

す。日中両国は一衣帶水の間であり、「春節祭」を通じて日中両国が民間友好關係を築く礎となるように期待しています。

先日、日中平和友好条約40周年の節目に、皆様のお陰で「春節祭」は5年目を迎えられたことを心より感謝申し上げます。この異国之地で、地域の方々とともに、母國の最大の伝統行事である「春節」が恒例行事となつたことは何より嬉しく思っております。

この5年間を振り返ってみると、ちょうど日中関係が新世紀に入つてから最も厳しい時期でした。尖閣諸島の領有権を巡る緊迫した状態が続き、政治・経済関係のイベントが次々に延期・中止に追い込まれていた時期に、母国を離れ、異国の方で頑張っている同胞たち、県内各大学の中国出身の留学生に呼びかけて、「春節」を通した親睦交流、日中両国の文化交流の場を企画して参りました。

この5年間を振り返ってみると、ちょうど日中関係が新世紀に入つてから最も

と思い直し最近の新聞に目をやると「年金受給開始 70歳越も」「高齢者一律65歳見直し」「地方インフラ縮め方探る」などの記事が目に付いた。なーんだ、要は財政が大変なんで早々に引退などせず100歳まで(は無理でも80歳位まで)は)働け!ということか。納得。

しかし、そういう経済はこれまでのような成長一辺倒の志向で良いのか?という疑問を持つている。日銀審議委員もつとめた著名なエコノミスト(でさえ)も「東京五輪後の日本経済」②の中で、日本社会はこれから「成長なき社会へ突入する可能性が高い」と述べている。所謂脱成長、成熟経済を志向する向きは硬軟取り混ぜて日々論じられている。(一例として「新しい幸福論」③「国家の成熟」④「定常型社会」⑤、さらにその冷静な考察として「人口と日本経済」⑥)



## 大分で学んだ 忘れられない授業

現役留学生 楊光

日本に来て4年間の間に、さまざまなことを感じましたが、一番印象深いのは日本で体験した障害者たちへの思いやりの心です。

最初にそれを実感したのは、2016年10月に行われた大分国際車椅子マラソン大会の時でした。その時私は通訳のボランティアとして、世界各地の車椅子選手と一緒に町に出たのですが、そのとき初めて、日本が障害者たちのために、さ

人生100年時代(私の場合あと40年)を生き抜いていきたい。「ミニクイズ」①~⑥の著者として正しいものを、次よりそれぞれ選べ。a 柚原英資、b 吉川洋、c 広井良典、d 白井さゆり、e リンダ・グラットン、f 橘木俊詔(正解はP.19)

まざまな取り組みや工夫をしていることが分かりました。どこかに行きたいと思えば、車椅子であっても、ほとんどどこへでも行けます。例えば、大きなショッピングモールや駅の中には必ず障害者用のトイレが作られています。また大学でも細かい心配りが見られます。例えば私が今通っている大分大学の経済学部の玄関の階段のそばには、障害者用の通路が備わっています。このように日本全国至るところにバリヤフリーの諸施設を設置しています。

それだけではありません。日本の障害者への取組には、さらに素晴らしいところがあります。アルバイトをしていた時に知ったのですが、日本では障害者たちへの生活補助だけではなく、確実に彼らを自立させるための支援体制を整えているのです。私がアルバイト先で経験したことです。そこでは、まず、大分市の障害者支援センターが店に障害者を紹介し、就職をさせました。それから、最初の一週間は、支援センターの役員さんがずっと彼のそばについて、仕事をする様子を見ていました。彼は主に服を袋から取り出して、ハンガーにかけることをしていました。その後、役員さんと店長が彼のことについて相談し、これからどうすれば彼が仕事において自分の技能を向上させていくかという課題への対策を練つていてました。

高度な発展を実現した社会とはヒューマニティ溢れる社会であり、障害者であっても、健常者と同じように、自分の力で生活できるように、多くの課題を解決するための努力を惜しまず、共に生き

ていく道を探り続ける社会なのだということを学びました。それは大分で受けて、この一生をかけても忘れない授業でした。

## 留学生生活の感想

現役留学生 宋霞

日本へ来る以前、私にとつて日本はルールを守り、先進的な科学技術を持ち、経済が発展しており、比較的に安全な国だった。実際に3年前に日本へ留学し、生活を送る中で、以前より感じていた日本の印象は身近なものとなつた。また、実際に日本で暮らすことで日本の新しい面を数多く見つけることができた。



私は留学する前には特に深く考えていなくて、せっかく日本語を勉強したから、日本へ留学してせめて語学力を上げようと思った。留学する前にわくわくしている気持ちがあつたが、不安に感じること



初代会長に高野浩子さん (大34回)

大分大学経済学部同窓会の四極会ならびに青雲会で念願だった女性部会がいよいよスタート。2月7日(水)、J-COM ホルトホール大分にて四極会女性部会設立総会が開催されました。

四極会女性部会を立ち上げるために、石川公一四極会会长ならびに三浦洋一四極会副会長(女性担当)の強力なバック

上りました。

総会では、石川会長、三浦副会長、大崎美泉経済学部長、城戸照子経済学部教授にご出席いただき、大14回生の大先輩を筆頭に大30~60回同窓会員、大学院生ならびに学部2年生の40名近くの女性

が分からなくて、乗り間違えた。また、携帯の契約とか病院の予約とか、母国にいる時まったく問題がないことでも問題になつた場合が少なくなつた。その時、日本人の友達、先生、バイト先の日本人の方から助けてもらつて、本当に感謝している。

また、学校の活動に参加することにより、日本へ来て日本人の友達ができただけではなくて色々な国からの留学生たちとも友達になることができた。各国の人と出会つて、世界の多種多様な文化と習

## 念願の四極会女性部会設立

慣を理解することは留学の苦しさ、寂しさではなくて、楽しさになつた。

私は大分に3年間滞在している間に、本当にたくさんの日本人の方から助けを感じている。これからそのやさしさや熱情をもつと多くの人に伝えようと思っている。また、日本について、まだわからぬことがあると思って、これから日本で就職し、もっと多くの事を学びたいと思う。また、自分の国の文化も日本人の方に伝えることにより、お互いの理解を深めたいと思っている。

会員が参加。まず、ご来賓の挨拶とともに、高野委員長による四極会女性部会設立趣旨や会則案の説明が行われました。会則について承認され、高野さんが初代会長として選任、相談役には三浦四極会副会長、事務局長に大園さん、副会長に佐藤三和さん(大45)と渡邊が指名されました。役員挨拶、集合写真撮影とつづ

き、懇親会です。城戸先生による乾杯のご発声とともに、幾人かの方々よりひとこといただき、和気藹々の楽しい会も会場閉館時間ギリギリのところで終了しました。

今回、総会に先立ち、女性部会セミナーも開催されました。女性の会として、何か学べるものがあれば参加の意義もあるというキックオフミーティングでだされた意見によるもので、木村蓮香先生による「色彩を味方に魅力溢れるライフスタイルを」という演題のご講義でした。

大園さんの名司会のもと、19時から始まつた会も盛会のうちに幕を閉じました。初回としては上々の滑り出しだったと思います。



集合写真、垂幕題字は木山広喜先輩 (大10回)

ところでの女性部会の立ち上げは、田中康生四極会相談役、相良浩四極会名誉会長と歴代の四極会会長たちも強く希望をされていました。高野さんは、田中大先輩方よりも集まつてもらい四極会の率直なイメージを聴いたり、女性部会の内容やこれらの方などについての意見交換が行されました。その成果をもとに、いろいろ考る考えるよりもまずは行動しよう!ということで、上記の通り、女性部会が立ち上

げるようにミッションを受けたこと、幸い若手の会は「昭平会」という形で活動できているが、女性部会の立ち上げは内心難しいだろうなと思いつつ今回設立されて感慨深いものがあること、なによりも田中大先輩にもとても喜んでもらえたのではないことをお話ししていました。し

かし、その田中相談役が、同会の活動を直接ご覧いただくことなくこの3月にお亡くなりになりました。ご冥福を申し上げるとともに、女性部会の維持や拡大ができるよう今後もお見守りいただければと思います。名称は「桃優会」に決まりそ

うです。四極会ならびに青雲会の女性会員の皆さんにも、この会の存在を知っていたとき、是非ともご参加ください。これらもよろしくお願ひ申し上げます。

(大36回、院12回) 渡邊 博子

## 29年度四極青雲会活動報告

### 第7回四極青雲会総会・記念講演および懇親会

平成29年5月13日(土)午後5時半からトキハ会館5階ローズの間で、第7回四極青雲会総会・記念講演および懇親会を開催。総会では28年度の活動報告および29年度の活動方針(案)、28年度の決算および29年度予算(案)、任期(3年)満了にともなう役員改正(案)、その他の案件が一括審議され以下の事項が決定。

(1)年1回の総会と定例会2回の開催にあわせて懇親会をする。②会報「青雲」第七号の発刊(3)役員改正については監事の交代し、新たに甲斐健文氏(36回)を選任し、その他役員は全員留任。会長は木本英光氏(4回)と鯨越英夫氏(21回)

の両氏、事務局長に岩尾明(32回)を選任。大分大学の下田憲雄教授、四極会の相良浩名譽会長、姫野昌治大分銀行代表取締役会長(20回)の3氏には引き続き顧問にご就任頂いた。(4)その他としては、院入学希望者の発掘と勧誘に励むこと、課題研究・セミナーなどの開催にあたり研究科との連携をさらに強化すること、四極会各支部主催の活動に進んで参加すること、母校100周年記念事業に尽力することなどが承認された。事務局から財政基盤強化のため入会金・年会費の会費収入増、会員名簿整理への協力依頼。すべて事前の持ち回り理事会で承認済みでしたので総会は短時間で終了。

記念講演の講師は大分商工会

議所会頭の姫野清高氏。演題は「大分県経済の現状と課題」。姫野氏は昭和25年のお生まれで、現在されながら、平成21年5月に大分商工会議所会頭ならびに大分商工会議所連合会会長にご就任。優れた経営者であり県内外の経済の現状と課題について精通されておられます。多領域の公的な統計数値を鵜呑みにするのではなく、それぞれの統計数値の奥に潜む経済の実体を鋭く分析され、県経済の発展のための有益な諸方策に関して、鋭いご指摘と建設的なご提案がなされ、極めて有意義なご講演でした。会頭にご就任以来、県経済の発展に多大なご尽力をなさり、多くの公職にも全力で取り組まれておられました。それだけに貴重なお時間を割いて頂き、ご講演賜りましたことに心より感謝申しあげます。



平成29年度 四極青雲会総会 H29.5.13(トキハ会館)



**第13回四極青雲会定例会  
—イノベーティブ経済セミナーとして大分大学と共に—**

平成29年8月26日(土)午後6時半から、全労済ソレイユビル3階にて、第13回四極青雲会定例会を開催。イノベーティブ経済セミナーとして大分大学経済学研究科との共催。

今回の講師は四極青雲会推薦の母校OGの大分県国民文化祭・障害者芸術文化祭・障害者芸術文化祭・障害者芸術文化振興局長(現職)。

演題は「文化振興施策について」。冒頭、大分県民のハートをつかみ記録的な入場者数を達成したあの懐かしの松方コレクションを引き合いに、大分県文化の歩みについて総括。文化事業は一過性に終わらせではない。大分県立美術館OPAMには、外観だけではなく見えていない部分に細心の注意を傾注した。OPAMは大分県の文化の創造に継続的に寄与するための中核施設としての役割がある。これから芸術文化による「創造県おおいた」をさらに推進する。



進する。具体的には、多彩な芸術文化に親しむ機会の充実、芸術文化の魅力発信強化、芸術文化ゾーンを核としたネットワークの構築、地域の人々の誇りや紹介、文化的なアイデンティティの基礎となる文化財・伝統文化の保存・活用・継承などである。それによって人々を豊かにし創造的で活力ある地域社会を構築する。そのためは、まず芸術文化の創造性を生かした行政課題に真正面から向き合うこと。次に創造性を生かした地域づくりをさらに推進すること。そしてより観光と芸術をセットで考え地域振興に生かしたい。海外の事例としては、工業都市でありますながら文化に力点を置いた

最後に、第33回国民文化祭・おおいた2018、第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会の概要について説明された。文化行政に対する決意と熱意が伝わるすばらしいご講演でした。大分県あげての大型イベントの開催準備などでご多忙のお忙いご講演ください心より感謝申し上げます。大会の成功に向けてますますのご健闘を心よりご祈念申し上げます。

セミナー終了後に同会館7階で懇親会を開催。関係者一同、講師の土谷晴美氏を囲み和食の「花邨」さんの美味しい料理とお酒で和やかに歓談。たまたま大分に滞在中の内田和男氏(大分大学非常勤講師・リスクマネジメント担当・エンパワー非常勤取締役・東京在住)にも特別に参加していただきました。

## 第14回四極青雲会定例会

平成30年1月27日(土)、午後5時半から、ホルトホール2階のサテライトキヤンパスおおいた講義室にて第14回四極青雲会定例会を開催。今回もイノベーティブ経済セミナーとして大分大学と共に講師は経済学部ご推薦の渡邊博子氏。大分大学経済学部社会イノベーション学科教授(母校出身/大学36回/院卒業、大分大学大学院経済学研究科生)。



科修了、中央大学大学院商学研究科博士課程修了。1994年4月から財機械振興協会経済研究所にて家電やIT産業の動向、新規産業創出、ユニバーサルデザイン視点からのモノづくりなどの調査研究に従事。2006年4月から城西大学現代政策学部にて「産業政策論」「消費経済論」「医療・福祉産業論」などの科目を担当とともに、キャリア教育プログラムにも取り組む。2017年4月から現職、新しく設置された社



会イノベーション学科に所属。四半世紀ぶりに大分に戻る。

演題は「大分のモノづくりとイノベーション」。

はじめに、産業経済論の総体とその歴史的な流れに沿った産業構造の変化と経済学における産業研究の有り様について概説された。本論では、イノベーションとの関連性を重視して以下の4つに論点をしぼり、産業構造の世界的潮流と日本を取り巻く社会環境の変化に着目しながらとりわけ地元大分県の現状について論じられた。

(1)イノベーションの概念と日本での意味づけ(2)日本経済の道のりとモノづくり(3)大分のモノづくりと課題(4)経済学部における取組みと今後の展開。

(1) イノベーションの概念と日本での意味づけ(2) 日本経済の道筋のりとモノづくり(3) 大分のモノづくりと課題(4) 経済学部における取組みと今後の展開。



きわめて盛り沢山の内容であつたが、体系だって丁寧に整理されたレジュメにそつて、具体例をひきながらわかりやすく話された。

特に(3)の大分のモノづくりと課題については、地域に根付くイノベーションの事例紹介を交えながら、大分モノづくりの歴史・特徴・現況・課題について説明された。最後に、なにより地元と密着に連携しつつ研究を進めたいと述べられた。限られた時間内でのご講演でしたが、わかりやすい素晴らしい内容で

着任後間もなく、尚且つ新学科の運営面など何かとお忙しいところご講演いただき心より感謝申しあげます。

セミナー終了後、JR九州ホテルプラツサム大分8階、「庭の食卓・四季」にて2018四極青雲会新年会を開催。大学関係者ならびに四極会関係者、現役の留学生院生や会員など約45名が参加。現役留学生の自己紹介や初参加の会員のスピーチが初々しく、新年会に相応しい会になつたのでは。関係者の皆様ありがとうございました。

祝ご入学。ご健闘を祈念しています。  
大いに交流を深めましょう!!

事務局

皆様ご承知のように、当大学院生は年齢・職業・学部・専門領域・出身地など実にさまざまです。そこで、だれでも参加でき楽しい意義のある交流の場が欲しいという各位の熱意と情熱から、大分大学大学院経済学研究科同窓会「四極（しわす）」責任者会議が平成23年4月に誕生しました。会員相互にあくまで対等な関係で集結し、異業種交流をしながら切磋琢磨しつつ、ファンリーや的な繋がりをも大事にしながら、母校経済学部や同窓会

四極会本部と連携して親睦会やセミナー等を行っています。現役院生にも参加資格が認められていますので、多くの皆様の積極的なご参加を期待しています。活動内容に関しては同封の会報誌「青雲」第七号をご覧ください。

平成29年度の入学者のご紹介

**博士前期課程**

赤嶺聰一郎（租税法／伊藤ゼミ）、岩崎寛治（租税法／伊藤ゼミ）、大坪美奈子（社会政策論／石井ゼミ）、里中玉佳（経



平成29年10月入学式



平成29年4月入学式

大分大学大学院経済学研究科には、経済・社会などの諸問題に関心を持つ方々が自由に参加できる「課題研究」という特別講座が設けられています。経済をとりまく諸問題に精通した学外からの豪華講師陣による特別講義です。開設当初は旦野原の大学キャンパス内で実施されていましたが、受講生の利便性などを考慮して、市内中心部のホルトホール2階セミナールームでの開講です。ここ数年一般の受講生が増え徐々に認知され始めたようです。開講日時は例年11月～1月の土曜日、10時～12時の2時間（休憩・質疑応答込）

### まだこれから、現役院生と一緒に受講しませんか。 四極青雲会と共に催の「課題研究」へのお誘い!!

み）。ご参考に29年度の「課題研究」を紹介します。

11月18日(土)

「大分県の挑戦」

神崎 忠彦 氏

(大分県商工労働部長)  
12月2日(土)

「最近の金融情勢について」

濱田 英夫 氏  
(日本銀行大分支店長)

12月9日(土)

「労働環境をとりまく課題と対策」

小笠原清美 氏 (大分労働局長)

12月16日(土)

「日本の財政問題をどう考えるか」

佐藤 正之 氏 (九州財務局長)  
1月20日(土)

済史／市原ゼミ)、鄒毓賢(国際関係論／高山ゼミ)、張璇(国際金融論／小笠原ゼミ)、友清沙織(租税法／伊藤ゼミ)、龜田一平(経営戦略論／仲本ゼミ)、畠田一弘(マーケティング論／松隈ゼミ)、楊光(企業ファイナンス論／鵜崎ゼミ)、李昕誠(経営組織論／本谷ゼミ)、劉曾一(国際経営論／宮下ゼミ)以上春季9名。閻娜娜(国際金融論／小笠原ゼミ)、鐘慧(社会政策論／石井ゼミ)、韓明啟(農村発展論／山浦ゼ

ミ)、工藤将之(憲法／青野ゼミ)、馬琳(マーケティング論／松隈ゼミ)、松井督治(地域発展論／宮町ゼミ)、以上秋季8名。

### 博士後期課程

井上桂太郎(労使関係論／石井ゼミ)、栗林栄太(企業ファイナンス論／鵜崎ゼミ)、西村容子(国際政治論／Stephen Dayゼミ)、西本山海(企業ファイナンス論／鵜崎ゼミ)以上4名。

### 事務局

「ラグビーワールドカップ開催と大分県政」  
廣瀬 裕宏 氏  
(大分県企画振興部長)

### 県内就職を目指す院生各位!! 先輩諸氏の情報網を活用しませんか。



九州財務局長 佐藤 氏



日本銀行大分支店長 濱田 氏



大分県企画振興部長 廣瀬 氏



大分労働局長 小笠原 氏

昨年度は研究科と青雲会の共催で大学院留学生を囲む第1回ランチタイム交流会を開催しました。現在大分で活躍中のOG／OBの方々にも参加いただけました。主に院での学び方、県内就職にあたっての必要な資格取得について意見交換しましたが、本年度から開催を見合われることになりました。その理由は四極会大分支部が就活サポートのための企業人OG／OBとの交流会を例年11月の初旬に開催しているからです。回を

お誘いあわせのうえ多く皆様のご参加を期待しています。詳細については、経済学部総務課までお問い合わせ下さい。



和やかな雰囲気で懇談



第5回 学生と先輩との交流会

重ねるごとに充実した交流会に発展してきています。昨年大分市のホルトホールで開催された

編集後記

第5回目の交流会には、経済学部の学生90名、先輩諸氏62名が参加しました。就活のガイダンスを中心と/or>ても有意義であつたという意見が多数寄せられています。学部生・院生の区別なくどなたでも参加できます。県内就職を視野にいれておられる院生は是非ご参加ください。本年度の開催日時など詳細については、経済学部総務課もしくはゼミの指導教官にお問い合わせください。

春が巡つてきました。それぞれの人にとって何度目の春だろうか？同じロケーションでも、景色は今と昔では少しづつ変化している。少なくとも匂い、色合いは変わつてきている。そして、人の気持ちも勿論のことである。

今年も無事「青雲」を発刊することができましたことに感謝申し上げます。

この度、ご投稿いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。そしてなによりも取りまとめをされた岩尾事務局長のご尽力に大いなる感謝を申し上げます。歴史は続きます。ありがとうございました。

東北大震災より、七年が経過しました。熊本・大分の震災から約二年、そして、九州北部水害、大分南部水害が、昨年発生しました。このような自然災害により多くの方々が犠牲になっています。非常に悲しいことです。不可抗力により犠牲になる。関係する残された人も悲しみと

人と人との繋がり、これほど大事なものはありません。「責任雲」の刊行も人と人との繋がりで成り立っています。社会は人生の機微で成り立っています。一期一会、同じ時間、空間を共に何らかの関係を持つことで、機微が生じる。そこで人は想い、人は感じる。

最近、俳優で、自称名バイプレイヤーの「大杉連」氏が急逝した。僅か前までは何の変化もなく、本当に突然のことのようだつたそうです。そして、50歳半ばより作家に転向をし、時代小説の名作を残し、急逝した「葉室鱗」等々が近々話題になりました。彼らは、一気に時なりました。

一場面のセリフで、「人間の運」について触れていた。人生をその一言で言いきつてしまふのは切ない、寂しい。でも、自分でどうにもできない力が働いていることも否定できない。唯心論か唯物論かと論争にもなるが、いずれか?といえば、私は唯物論支持かも知れない?

いう大きな荷物を背負うことになる。いずれの立場でもとても寂しい。人は生まれ、生き、そして去っていく。自分が望もうが望まないが、それが定めである。そして、カタストロフィーは起り、歴史は繰り返されいくのである。

しかし、文明が進み、自然不可抗力の予測がある程度できるようになり、物理的にもそれらを防御することもできるようになつてきているので、状況としては最小限の被害に食い止めていく、取り組みができるいくこととは間違いない。

改めて喜びを感します

最後に、今後とも、より多くの方々に広く投稿をお願いしたいと思っておりますが、今まで、既に「青雲」に投稿を頂いた方々についても、今後二度目、三度目の投稿をしていただいても構いません。自分の想うこと、感じることを好き勝手に文書にしていただき、継続的に投稿をしていただけすると助かります。

「青雲」の刊行を是非続けていきたいのです。

今後とも、「青雲」をよろしくお願いします。大きな輪が広がっていきますように。

ご投稿いただいた方々、編集に関わった方々に改めて御礼を申し上げまして、編集後記とさせていただきます。

最後に今後ともより多くの方々に広く投稿をお願いしたいと思つておりますが、今まで、既に「青雲」に投稿を頂いた方々についても、今後一度目、三度目の投稿をしていただいても構いません。自分の想うこと、感じることを好き勝手に文書にしていただきて、継続的に投稿をしていただけると助かります。

「青雲」の刊行を是非続けていきたいのです。

いきたいのです。  
今後とも「青雲」をよろしく  
お願ひします。大きな輪が広  
がつていきますように。  
ご投稿いただいた方々、編集  
に関わった方々に改めて御礼を  
申し上げまして、編集後記とさ  
せていただきます。

代を 時間を駆け抜けた。死に  
急いで大きな役割を果たし、足  
跡を残して、去つていった。こ  
れにも驚いた。